



さとのかせ

No.172号

千葉県いすみ環境と文化のさと

2010年7月1日発行

編集・発行 千葉県いすみ環境と文化のさとセンター

指定管理者 (財) 千葉県環境財団

〒298-0111 千葉県いすみ市万木 2050 番地

TEL 0470-86-5251 FAX 0470-86-5252

URL <http://www.isumi-sato.com/>

「菜の花エコプロジェクト」(さとのかせ No169 参照)では
6月8日に菜種の収穫を行いました。



今年の4月は雨が多く気温も低めだったことの影響と思われますが、10月に播いたナタネの実の生長も遅れがちでした。菜種油を採取する目的のセイヨウアブラナは、花の時期が在来のナノハナよりも3週間近く遅く開花して、3月4日には畑で黄色い花を楽しめました。実の充実に合わせて茎の根元付近から上部の刈取を行いました。昨年よりも収量は少なめでした。残った根は、鍬(クワ)で畑から掘り起こし取り除きました。

刈り取った部分は、ご厚意で貸していただいたハウスに移動して二週間ほど乾燥させ、鞘から実を落として種を集めます。集めた種は、昔の農具唐箕(とうみ)でごみを飛ばした後、搾油機を使って油を絞る予定です。取れた油が菜種油です。サラダのドレッシングとしても最高級の食油となるそうです。さて、今年は何だけの菜種油が絞れるのでしょうか？

■ 夷隅川流域よもやま話 —その1・まず川の話—

・はじめに

いすみの環境のエリアとは、どこまでの範囲なのでしょう？ 房総半島では広すぎるし、南房総では少し南すぎるし、外房でも丘陵山間部が外れるようですし…

少し考えてみましたところ、「夷隅川流域」の範囲をいすみの自然環境・文化のエリアとして捕らえてみようと思いました。「流域」という範囲はひとつのまとまりを持った自然環境・文化を把握するためにはちょうどよいスケールではないかと思ったのです。流域の意味を以下に掲げてみます。

[広辞苑]

河川の流れ行く地域。すなわちある河川の四囲によって囲まれた地域。

[大辞泉]

河川の流れに沿う地域。また河川に流れ込む降水の降り集まる地域。集水地域。その河川の分水界に囲まれた地域。

英語では [basin] で、①たらい、洗面器 ②鉢 ③盆地、流域 の意味です。

今号から、「夷隅川流域よもやま話」として、いすみのいろいろな話題を取り上げて行こうと思います。

・千葉県の川

千葉県で一番大きな川は、ご存じ利根川で、千葉県境北を流れる一級河川です。

利根川は、新潟と群馬の県境にある標高1,834mの大水上(おおみなかみ)山に流れを発生し、関東平野を流れて河口となる銚子に至り海に注いでいます。幹川流路延長は322kmで、日本では信濃川に次ぐ2番目の長さですが、全流域面積は16,840km²で日本最大です。坂東太郎とも呼ばれ、筑後川(筑紫二郎)、吉野川(四国三郎)とともに「日本三大河」になっています。江戸時代初期までは東京湾に流れ込んでいましたが、水運や治水のために徳川家康が“瀬替え”の号令を出し利根川の東遷の大事業が始まりました。河口が定まったのは明治になってからということで、250年以上の長い時間をかけて人の力で川の流れを変えたのです。

一級河川は国が管理し、二級河川は都道府県が管理する川です。一級河川は複数の都道府県を流れ、二級河川はひとつの都道府県の中を流れるということで管理が分かれています。

次の図のように、千葉県の分水界は大きく4つに分かれます(太平洋—東京湾分水界、津森山—館山分水界、清澄山—大原分水界、土気—銚子分水界)。そもそも日本の河川は、世界の川と比較すると「滝だ!」といわれるほど勾配が急で長さは短いという特徴を備えています。高い山のない千葉県の川のほとんどは、河川延長が短い、流域面積が小さい、河川勾配が緩い(最上流部を除く)などの共通点を備えています。房総半島西側では、養老川・小櫃川・小糸川が、東側では栗山川・一宮川・夷隅川・加茂川などが大きな川として揚げられます。



・夷隅川の特徴

千葉県の(二級)河川の中で、夷隅川は、千葉県第1位の流域面積をもつ河川で、延長では第4位、約68kmです(次表参照)。

勝浦市上植野(勝浦ダムの近く)を水源とし、房総半島南東部を緩やかに流れて複雑に蛇行し、流域には、山林・竹林・水田・ため池が多く、農耕利用と共に多様な生物の生息場所となっています。

流域面積と延長——千葉の上位5河川

No	名称	流域面積 k m ²	No	名称	延長 km
1	夷隅川	299.4	1	小櫃川	88.0
2	栗山川	292.3	2	小糸川	80.0
3	小櫃川	273.2	3	養老川	75.0
4	養老川	245.9	4	夷隅川	67.5
5	一宮川	222.0	5	加茂川	44.0

河口周辺には、干潟があり、潮止めの堰まで 6km 以上の区間が干満の影響を受けているため、川に生息する生物種数は 100 種、長良川に次いで日本で第 2 位といわれています(さとのかぜ No76 参照)。なお、源流については崖の海岸である勝浦の「おせんころがし」近くの丘陵上部にあたる上大沢とする人もいますようです。

流路を変更する工事や大規模な河川改修工事が行われていないことも、多くの生物が生

息する理由になっていると考えられます。夷隅川の岸边は、現在では放置状態の竹林が多くなって水面に張り出しています。大雨が降って水位が上昇すると竹が川に流されます。大きな台風の跡には、河口周辺の海岸が竹で埋め尽くされてしまうことがあり、大きな環境問題にもなっています。砂浜が竹のゴミだらけで好ましくない景観になることに加え、孵化したアカウミガメが海に帰る障害にもなり、海浜植物への影響も大きく、他にも人間が気づきにくいいろいろな生き物たちへの影響が生じていると考えられます。

河口周辺では、最近では毎年夏休みの前に、いすみの市民や海を利用する人たちがたくさん集まって大規模な海岸清掃が行われています。その「ビーチクリーンアップ岬」は、今年も 7 月に行われます。

参考: 千葉県の自然史 本編 1、本編 2

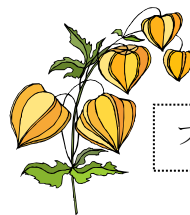
夷隅の方言—第 3 回—

前号に続き、夷隅の方言について紹介します。

方言はお国言葉であり、その人のルーツを表し、懐かしさや親しみがあります。その地域を離れても、忘れずにいたい大切なものです。誇りを持って、大いに語りましょう。

さて今月の方言です。

★方言クイズ★



フウズイが赤くなったな。

きれいなカザンバですね。



そろそろコジャにするか。

お前はムサンコ過ぎるよ。



答え

- ・ホウズキが赤くなったな
- ・きれいな花壇ですね
- ・そろそろ 3 時のおやつにするか
- ・お前は強引過ぎるよ

方言	標準語
アンゴム	またぐ
ウッチャル	捨てる
オセル	教える
カックラス	殴る
クンナ	ください
グレッポ	最下位
ゴタラク	文句
ソロット	おもむろに
ダダッピレー	非常に広い

これを使いこなすことができれば、もう夷隅人?でも、グレッポ取ったらカックラスぞ～なんて、乱暴なことは言わないでくださいね!

初夏の畑

現在センターの畑では、計 14 種類の作物を栽培しています。

アブラナ科	ダイコン
ナス科	ナス、ピーマン、トウガラシ、 トマト、ジャガイモ
マメ科	インゲン
ユリ科	ネギ
ゴマ科	ゴマ
ウリ科	キュウリ
ヒルガオ科	サツマイモ
サトイモ科	サトイモ
トロロアオイ科	オクラ
アオイ科	ワタ

冬にかけてはアブラナ科の作物が多かったのですが、夏はナス科の作物を多く栽培しています。

この内、ジャガイモ、インゲン、オクラ、トウガラシ、ゴマ、サトイモ、ワタは昨年栽培しなかった新しい作物です。

新しい作物の中で、ゴマはゴマ油の搾油を目指し、トウガラシは冬から秋にかけて続発

した、動物による食害を防ぐ道具にするため栽培しています。

ワタの種は、障害者サポートセンターあつとほ一むさんから譲って頂いたもので、鴨川和棉農園（種を取る前は棉で後は綿）というところから、日本の綿の原種を残そうという活動で伝えられた大島種という和綿です。

センターでは、その綿を「つるでリースを作ろう」行事で飾りとして使用する予定です。

昨年同様、サツマイモは芋掘り&焼き芋行事のために栽培しています。



(サトイモ用のウネ作り風景)

初夏の水田

春の天候不順で、稲の生育が心配でしたが、5月1日の行事「田植えをしよう」で植えた稲は、分けつ（親株から新しい茎が出ること）も順調に進み、ますますの生長です。



(6月10日撮影 田んぼ)

6月下旬には水を抜いて（落水）、中干しをします。水は、地中に酸素を送るためと、分けつを抑えるために抜きます。あまり分けつ過ぎると実つきが悪くなってしまい、それを無効分けつと呼びます。

行事では一ヶ所に 3 株～4 株ずつ植えてもらったので、15～20 に分けつしたら中干しのサインです。

中干しするまでは、常に水を切らさないようにします。水があることによって、分けつは進み、雑草の生長も阻害できます。

落水した後は、水を入れたり、また落としたりしながら 8 月下旬頃には完全に水を落とします。

そうして、秋になると実が詰まって、頭を垂れた稲穂の収穫となるのです。

心配な点としては、春先の雨と低い気温ため、イネドロオイムシが例年より多く発生しています。昨年はあまり目立たなかった稲の害虫です。葉を食い荒らす困った存在ですが、無農薬栽培のため大掛かりな駆除ができない状況です。7月に入ると、ほとんどの幼虫はいなくなるそうなので、それまで稲の生命力に任せることになりそうです。

地球環境問題のいろいろ -③ 炭素循環 -

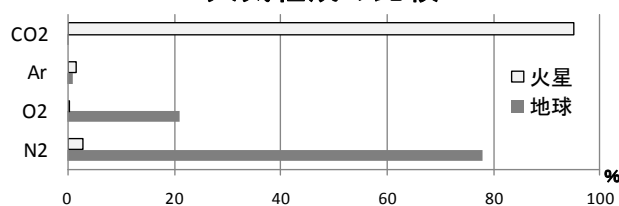
地球環境問題の話題で関心の高いものと言えば、やはり地球温暖化問題でしょう。この問題に関しては温暖化の脅威論から懐疑論、あるいは陰謀説までいろいろとありますが、観測された事実から、温室効果ガスである二酸化炭素の地表付近の濃度が上昇していることは間違いがありません。

この二酸化炭素がどこから来るのか。一番大きな要因が化石燃料の消費（燃焼）によるものなのかどうかも諸説があります。が、多量の化石燃料の燃焼（化石燃料に含まれる炭素と大気中の酸素が結び付いた）結果として二酸化炭素が排出されることは事実です。現在は大気中に 400ppm 程度（産業革命以前は 250ppm くらい）あり、窒素、酸素、アルゴンに次いで 4 番目に多い大気の構成要素です。

化石燃料とは石油、石炭、天然ガスなどを指しますが、ではこの化石燃料に含まれている炭素はどこから来たのでしょうか。それは今からおよそ 46 億年前、地球誕生にまでさかのぼります。

地球は宇宙塵（うちゅうじん）が集まり隕石を巻き込んで、塊からさらに大きなものへと成長して今の大きさになったと考えられています。塊が大きくなり、高温高压でドロドロの火の玉のような地球になったようです。この時、塵や隕石を構成していた物質が溶けて混ざり合い、密度の大小によって分化します。その中に気体もあって原始大気ができたと考えられます。ただ、地球の大きさが木星のように大きくなかったことから重力で引き留めておくことができず、大気中の軽い原子（水素など）は宇宙空間へ拡散してしまったと言われています。

大気組成の比較



今の地球と火星では大気組成は大きく異なっていて、火星大気中の二酸化炭素濃度は 95% もあります。実は生まれたばかりの地球は二

酸化炭素濃度が火星なみにあったと考えられています。しかし、地球では 46 億年の間に光合成をする生命が誕生したのです。

光合成をする生物はまず海に誕生し、水に溶けている二酸化炭素を吸収して酸素を水中へ放出します。さらに地上へも植物が進出し、多量の二酸化炭素を吸収して酸素を大気中へ放出しました。その結果が今の地球の大気組成へとようになっていくのです。この過程で、海中の光合成生物の死骸が海底にたまり、やがて石油や天然ガスへと変化していきます（石油の有機起源説といいます。無機起源説を提唱する人もいます）。海中のサンゴも二酸化炭素を吸収し成長しました。そして石灰岩となります。陸上では植物の遺骸が集積してやがて石炭になっていきました。

化石燃料に含まれる炭素のもとをたどると、地球が生まれた時の原始大気に含まれていた二酸化炭素へたどり着きます。人間誕生以前の地球の生物の活動により大気中の炭素は形を変えて固定されていたこととなります。いま私たち人間の活動が化石燃料を燃やすこと、石灰岩を焼成してセメントを作ることは、地球に生物が誕生するよりも長い時間スケールで捉えれば、炭素（あるいは二酸化炭素）を元の場所へ戻す行為ともとれます。

現在、どこにどれだけの炭素が集積しているのか。大まかには石油や天然ガスで 300Gt（ギガトン）、石炭で 3,000Gt、堆積物として 1 億 Gt といった数字が知られています。化石燃料の消費は年間 5.5Gt なので、今のペースで使っていけば石油は 55 年、石炭は 545 年で使い切る計算になります。

では使い方を工夫すればいつまで持つのか。EIA(The U.S. Energy Information Administration) では石油資源を今後も順調に開発し、かつ 2000 年の消費レベルを維持すれば、2100 年くらいまでは同程度を使い続けられるという予測も紹介されていますが、危機感を感じる人が最近増えてきたようです。

[参考]

1. 酒井治孝(2003)地球学入門, 東海大学出版会
2. UNFCCC ホームページ feeling the Heat
3. John H. Wood et al.(2004)Long-Term World Oil Supply Scenarios

万木の浅間様のお祭り

7月1日は富士山や他の山開きの日です。万木城の展望台からも富士山のでっぺんがかろうじて見えますね。環境省では、富士山八合目に赤外線カウンターを付けて登山者の数を把握していますが、平成21年7月1日～8月31日まで約292,000人の登山者があったそうです。それでも天候不順のためか、平成20年より13,000人減少したそうですが、約300,000人の登山者が富士山の山頂を目指したわけです。

しかし、交通機関の発達していない昔などは、旅行はおろか、富士山登山などは困難でした。その代わりとして、頂上に浅間神社をお祀りしたミニチュア富士山（富士塚と呼ばれています）を建設し、陰暦の6月1日の前後にお参りしたようです。このことで、富士山登山と同じ功德が得られるという信仰が江戸時代に生まれました。このように、富士山とそこに鎮座する神への信仰の形態は、富士講あるいは浅間講と呼ばれています。

万木地区でも、万木城の登山口沿いの小山に浅間様（浅間神社）がお祀りされており、7月1日にお参りする行事があります。これが「万木の浅間様のお祭り」です。

平成21年までは、新暦7月1日の7時にお祭りがありましたが、平成22年からは7月の最初の日曜日に変更になりました。

お祭り当日には、朝の6時に氏子総代さんや地区役員さんが神社で祭典の準備をし、7時には子供達がお参りにあがって来ます。お祭りが始まると、神職による祝詞奏上（しゅく

しそうじょう）があり、その後、子ども達にはお菓子やお餅が配られます。お祭りの終了後には、役員さん達は万木の区民センターで直会（なおらい）となります。

参道はかなり急坂ですが、手すり付きのコンクリート道や、コンクリート丸太による階段が整備されて登りやすくなっています。そのため「さかなぎ」といわれる参道整備の作業はありません。

万木の浅間神社に納められている木札には、この神社名は「富士嶽浅間大神」で、御祭神名として、中央に「天之御中主尊（アメノミナカノヌシノミコト）」、右に「天照大御神（アマテラスオオミカミ）」、左に「木牟開耶姫命」と記載されています。この「木牟開耶姫命」は、富士山の御祭神「木花之佐久夜毘売命（コノハナサクヤヒメノミコト）」と思われます。

この神社は、大正5年12月に周辺の神社が合祀され、日之宮大神、熊野三柱大神、素戔嗚尊、愛宕火玖突智大神、大山咋之大神など、神様いっぱいのお祭りになりました。

お社は昭和38年に修理され、さらに平成6年3月に改築され、現在に至っています。平成6年の改築の際には狛犬が奉納されました。



このような浅間様のお祭りは、夷隅郡市のあちこちあるようですが、御祭神の御神徳は「家庭円満・安産・子安等」ですので、神様に子どもの健やかな成長を願う、地域の人たちの暖かい気持ちが感じられます。

（取材協力：石井正和氏、菰田 治氏、平山 豊氏）

ここです



鳥の話題

●春から初夏に見られた鳥

よく出会える鳥としては、万木堰内でカルガモ、カイツブリ、カワウ、アオサギが、堰の上空にはツバメの飛翔が見られます。センター敷地内や付近の林にはウグイス、シジュウカラ、メジロのさえずる声が頻りに聞こえます。コゲラ、エナガ、ヤマガラは虫を探して動きまわっています。また、カケスはジャー・ジャーと濁った声で林と林の間を移動しています。その他にはハシボソガラス、ハシブトガラス、ダイサギ、ヒヨドリ、キジバト、トビなどがよく見られます。

出現頻度は低いのですが、センター施設付近の林でトラツグミの声が聞こえます。ツグミ類では最大の鳥でオスはヒー・ヒーと聞こえる声で細く高い声でさえずります。カワセミ、オオタカも時々見られます。



(オニグルミの木で鳴くオオヨシキリ)

この時期は冬鳥と夏鳥が交代の時期でもあり、冬鳥のシメ、ツグミ、アカハラ、シロハラ、ジョウビタキ、アオジは敷地内や付近の林で、キンクロハジロは万木堰で4月まで見られました。5月頃からオオヨシキリがアシ原でさえずり、アオバズクがセンター施設付近の林でホーホーと夕方から鳴いています。アマサギ、チュウサギは付近の水田で時々見られます。サシバは林の中でピックイーという鳴き声を聞きました。また、ホトトギスが5月の下旬から確認されました。

旅鳥としてクサシギが4月下旬に万木堰で見られましたが、すぐに立ち去りました。

●夏鳥の鳴き声 (主なもの)

ホトトギス：トッキョッキョカキョク

アオバズク：ホーホーと2声ずつ鳴く

セ ッ カ：ヒッヒッヒッと鳴きながら空に昇りチャッチャッチャッと声を変え下る

オオヨシキリ：ギョギョシ、ギョギョシ、ケケシ、ケケシ

サ シ バ：ピックイー

●確認された野鳥

(高田堰、夷隅川河口も含む)

アオサギ、アオジ、アオバズク、アカハラ、アマサギ、ウグイス、エナガ、オオタカ、オオヨシキリ、カイツブリ、カケス、カルガモ、カワウ、カワセミ、キアシシギ、キジ、キジバト、クサシギ、コアシサシ、ゴイサギ、コゲラ、サシバ、シジュウカラ、シメ、ジョウビタキ、シロチドリ、シロハラ、スズメ、セグロセキレイ、セッカ、ダイサギ、チュウサギ、ツグミ、ツバメ、トビ、トラツグミ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、ハマシギ、バン、ヒバリ、ヒヨドリ、ホトトギス、ムクドリ、メジロ、モズ、ヤマガラ

(47種類：50音順、夷隅川河口でのみ見られた種にはアンダーライン)

●最近気になったこと

スズメが減っていると一般的に言われています。ここいすみでも少なくなっているように見えます。また、サシバは以前は頻りに見られましたが、里山が減ってきて餌となるヘビやカエルの減少が影響してか、夷隅地区でもあまり見かけなくなってきました。

サギ類は以前はかなり見られましたが、最近は少ないようです。生態系の変化の兆しなののでしょうか。



(万木堰のゴイサギ)

《 行事報告 》

3月13、14日

炭焼きにチャレンジ



大人7名の参加がありました。
ドラム缶窯二つで、広葉樹木材と竹の炭焼きを行いました。焚口から薪をくべ、中の温度を上げていきます。本釜では、この作業を何日も行っていたそうです。

センターでは10時間以上掛かる予定でしたが、材が乾燥しきっていたのと、当日の強風でなんと15時には、13日に行う作業が全て終了してしまいました。

14日窯を開けたところ、密封が少し甘かったため空気が入り、材が燃えていたので水をかけて消火しました。竹炭の窯は概ね成功しました。

3月28日

早春のセンターで自然観察をしよう



直前のキャンセルもあり、大人2名の参加がありました。

寒い中でしたが、蓮田周辺、水田、デイキャンプ場水路沿い、畑とセンター内を一周移動しながらの観察となりました。

今回は、ルーペを使って身近な植物の新しい発見！ということで、普段何気なく通り過ぎていた植物を観察しました。水路ではホタルの生息環境を実際に観察し、カワニナを観察しました。畑ではアブラナ科の作物を観察しました。

みたことのない植物の断面、すばらしい！いつも見かけている植物を違う角度からみられた、といった感想をいただきました。

4月10日

センター周辺のいきもの観察



大人7名、小人1名、計8名の参加がありました。

セイヨウタンポポとカントウタンポポの違いに始まり、タンポポの花ってどれ？と言った話題、ヒメオドリコソウやカラスノエンドウの花や葉の観察をルーペを使い行いました。

ここでは、普段見ているのとは違った切り口からの観察で、新しい発見をしている方もいらっしゃいました。

植物をじっくり見る機会が少ないので、説明を聞きながら進めたので良かった、観察者の興味のあることを一言出してくれる進み方は良かった、といった感想をいただきました。

4月24日

万木城までの自然観察と里山ハイキング



大人6名、小人2名の、計8名の参加がありました。

本日はいつもの自然観察とは違い、お弁当持ってハイキング、4時間半の日程です。センターの畑から湿性生態園、万木城遊歩道歩いて、万木城展望台まで行きました。途中新緑が大変美しい…と感嘆の声が聞こえてきました。

万木の丘でお昼休憩を取った後は、海雄寺まで沢伝いの山道を歩きました。

長時間の日程でしたが、すごしやすい天候のなか、自然観察とハイキングを楽しんでいただけたようです。

5月1日

田植えをしよう



大人15名、小人5名の計20名の参加がありました。今年の春は天候不順で、田植えがどうなるかと心配でしたが、天が味方しました。

田植えの要領説明、素足になって田んぼに入りました。参加者が横一列になっての田植えです。始めは、慣れないため足元が泥に取られ、少してこずりましたが、段々と慣れてきて、その後の作業は順調に進み、80分で約800㎡程の田植えができました。

自然を満喫した、楽しかった、素足が良かった、家族との触れ合いができた、子どもの環境学習に役立つ、稲作文化の大切さを感じる、などの感想をいただきました。

5月8日

山田の鍾乳石と歴史の小さな旅



大人10名の参加がありました。

今回は歴史の小さな旅と銘打って、いすみ市の郷土資料館と、いすみ市山田地区にある穴堰の中に形成された鍾乳石の見学に行きました。

郷土資料館では、夷隅郡市の歴史や農業についての解説を聞きました。

鍾乳石がある穴堰は、地主さんの御好意で公開して頂いています。こちらで観察できる鍾乳石は、4~6cm程のストロー状のものです。足元の水溜まりでは、ヤマアカガエルやトウキョウサンショウウオの幼生が観察できました。

文化的な内容と、自然度の高い場所に行くという行事内容は、好評だったようです。

5月15日

岩船で磯の観察をしよう



大人5名、小人8名、計13名の参加がありました。

磯では、アゴハゼ、イワガニ、イソガニ、ショウジンガニ、イソクズガニ、ホンヤドカリ、ムラサキウニ、バフンウニ、イトマキヒトデ、ヤツデヒトデ、クモヒトデ、マダコ、アメフラシ、カメノテ、フナムシ、タマキビガイ、クボガイ、バテイラ、ワカメ、アマモ類、計20種類の生き物が観察できました。

中でも、子どもたちにはマダコが一番人気で、タコの体のつくりから、どうやって歩くのといったことをじっくり観察しました。

6月5日

ホタルの里でホタルを見よう



大人16名、小人3名の計19名の参加がありました。

センターでゲンジボタルの学習をした後、いすみ市山田まで移動しました。到着は19時頃でしたが、まだ空は明るくゲンジボタルの発光は観察できませんでした。ゲンジボタルの発光が観察できたのは、19時30分過ぎからでした。

この日は少々肌寒い夜で、ホタルの飛翔も予想より少なめでしたが、自然の中でホタルの発光を観察できて良かったといった感想がいただけました。最後にヘイケボタルの発光も観察し、解散致しました。

6月12日

センター内小川でホタルの観察



小人5人、大人15人の計20名の参加がありました。

当初はセンター内の小川のみでの観察を予定していましたが、陽が完全に落ちるまでの待ち時間が長いということで、センター近くのダムまで足を伸ばしました。

センターに戻ってから、デイキャンプ場でゲンジボタルの集団発光を観察しました。ちょうど発光のピークで、数多くのゲンジボタルの観察ができました。

皆さん、ホタルの光を堪能していただけたようです。

☆行事報告の詳しい内容は、センター日誌 (<http://isumisato.exblog.jp/>) にてご覧いただけます。

これからの行事案内

8月 (6月1日から受付開始)

●夏の星座観察

1日(日)18:30~20:00 定員20名 雨天:星のお話
夏の大三角形など夏の夜空の星座観察をしましょう。
対象:小学3年生以上
持物:飲物、虫よけスプレー

●トンボの沼のトンボを見に行こう

21日(土)9:00~11:30 定員20名 雨天22日(日)
チョウのように飛ぶチョウトンボ等を探しに行きましょう！
対象:小学3年生以上
場所:スポット地区⑥トンボの沼
持物:虫捕り網、飲物、帽子



●いすみ健康草履をつくろう

22日(日)10:00~15:00 定員8名
ワラに似た質感のPP(ポリプロピレン)ひもを使って
いすみ健康草履をつくりましょう。
対象:小学4年生以上
▲参加費(1500円)
持物:工作バサミ、飲物、弁当



9月 (7月1日から受付開始)

●米作り2・稲刈り体験

4日(土)9:00~14:00 定員40名 雨天5日
春に植えた稲には穂がいっぱい！皆で刈り取りましょ
う。
対象:小学生3年生以上
▲参加費(一家族500円)
持物:稲刈り鎌、タオル、軍手、長靴、長袖の服、帽子、弁当、飲物



●センターの谷津で自然観察

18日(土)9:30~11:30 定員20名 雨天順延19日
秋のはじまりのセンターでは何の生きものが見られるかな？
対象:小学4年生以上
持物:長袖の服、帽子、飲物



●いも掘り・焼きいも体験

25日(土)10:00~14:00 定員20名 雨天順延26日
センターの畑でいもを掘って焼きいもをしましょう。
対象:小学生3年生以上
▲参加費(一家族500円)
持物:新聞紙、アルミホイル、飲物、弁当
長靴、軍手



10月 (8月1日から受け開始)

●竹トンボを作ろう

3日(日)9:30~12:00 定員20名
自分の竹トンボを作って飛ばしてみましょ
う。
対象:小学4年生以上

●草木染め体験

9日(土)10:00~15:00 定員20名 雨天順延10日
自分でデザインをして、自然の色で染めましょ
う。
対象:小学生3年生以上
▲参加費(1000円)
持物:剪定バサミ、作業できる服装、お弁当、飲物

●竹かご教室

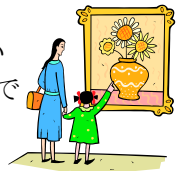
全4回開催 定員20名
23、24、30、31日(各土曜日曜)10:00~16:00
竹取り、ひご作りから始めて4回終了までに
完成させましょ
う。
対象:高校生以上、全4回参加できる方
▲参加費(500円)
持物:竹用ナタ、竹ひきノコ、膝あて
植木ばさみ、軍手、弁当



11月 (9月1日から受付開始)

■ 第14回 さとの文化祭

16~23日(火曜日~火曜日)
自然を様々な形で表現した作品がセンターに飾られ
ます。鑑賞はご自由にどうぞ。
作品応募:センターにお問合せ下さい
作品搬入:10月26日~11月2日まで



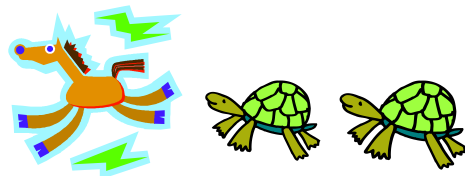
●たこを作ろう

①20日(土) ②21日(日) 9:30~12:00
各回定員親子6組
凧をつかって、揚げてましょ
う。
対象:小学4年生以上
▲参加費(500円)
持物:工作バサミ、軍手、飲物



●米作り3・わらでおきもの細工を作ろう

28日(日)10:00~15:00 定員20名
縁起のいい亀のそばに馬がいるとうまくいきます。
対象:中学生以上 ▲参加費(100円)
持物:植木バサミ、座布団、寒くない服装、お弁当



センターの生き物たち



ホタルブクロ／キキョウ科

山地の林縁や水辺、斜面などに生える多年草で、しばしば群落をつくります。6月から7月にかけて茎をのびし、その先に釣鐘型の白色から淡紅色の花をつけます。

センター周辺では、林道沿いの斜面で多く観察することができます。

名前は、花の中にホタルを入れて遊んだという説と、ちょうちんを昔は火垂（ほたる）と呼び、その形に似ているからつけられたという説があります。



ミヤマクワガタ／クワガタムシ科

深山（ミヤマ）と名前につきますが、平地でもみられるクワガタムシです。

成虫は交尾・産卵が終わると、越冬せずに死んでしまいます。卵から成虫まで2～3年かかり、幼虫は朽木、成虫は樹液をエサにします。昼間でも活動し、成虫は6月～9月に出現します。

センター内の雑木林でも、じっくり観察すれば出会えるかもしれません。

いすみ楊枝 —千葉県伝統工芸品—

センターでは、「いすみ楊枝」を県内外に広く紹介するため、毎月高木守人氏に実演をお願いしています。

日時 毎月第3日曜日(9:30～16:00)

場所 ネイチャーセンター

講師 高木守人氏

参加料 材料費など実費をいただきます

内容 楊枝・花入れ・茶杓作り など

編集後記

今年の冬は寒いと言われながらも、終わってみれば平年よりは暖かだったようです。そして春も気温の変動は大きかったようですが、東日本は平年並みのようでした。温暖化が進んでいると言われていますが、今年の夏はどうなるのでしょうか。

そんな気候の中、5月の連休はたくさんの人に来ていただきました。また11ページで紹介してあるように、これからも色々な企画をたてています。センターの企画のいくつかは、学校行事や子供会などの行事にも、別プログラムとしてご利用いただけます。お気軽にご相談ください。

皆様のご来館をお待ちしています。 所長

行事への参加申し込み、お問い合わせは、電話(0470-86-5251)、ファックス(0470-86-5252)、または、直接センター事務室にお申し出下さい。定員のあるものについては、定員になり次第締め切らせていただきます。あらかじめご了承下さい。全ての行事はネイチャーセンターに一度集合してから移動します。

*eメール可(メールアドレス:senta-sato@isumi-sato.com(すべて半角小文字です))

*行事申し込み後、都合によりキャンセルする場合は必ず早めにセンターまでご連絡下さい。

◆ ◆ ◆ 利用案内 ◆ ◆ ◆

休館日：毎週月曜日(月曜日が祝日の場合はその翌日)、12月29日～翌年1月3日

開館時間：9:00～16:30、入館料：無料

※当施設のご案内や解説などを希望される団体は、2週間前までにお申し込み下さい。